

北欧 2 カ国での生活デザイン研修

毛利 洋子

Life design training in two Nordic countries

Yoko MOHRI

Abstract

This is a report of overseas training which is carried out once every two years. The subject name is Life Design Training, and the content is a training trip. This time in February 2020, the class visited Norway and Finland. In this report, I record the details of the trip focused on architecture, interior and urban design, aiming to enhance design education of the department.

Key words: 建築 Architecture, ノルウェー Norway, フィンランド Finland, 海外研修 Overseas training

1. はじめに

活水女子大学健康生活学部生活デザイン学科では、カリキュラムの1つである「生活デザイン研修」を隔年で実施している。この取組は、教職員により1年弱にわたり計画され、学生は後期での事前研修を経て2月末の研修旅行に参加し、次年度前期に事後レポートによる報告を行う内容である。過去には海外研修を主に実施してきたが、近年ではテロ事件等の影響を受け、国内に留まっていた。2019年度は、海外情勢の多少の落ち着きと、渡航先の状況把握により、海外研修での実施を試みた。研修先には、生活デザイン学科のカリキュラムとの適正が何よりも必要であるが、生活空間を充実させるデザイン力に着目し北欧に研修先を定めた。北欧の充実したインテリア空間に着目する事で、関連するファブリック、プロダクトと本学科のデザイン対象を多くカバーできるプログラムを試みた。本稿で実施内容を記録し、研修内容、教育的側面から、今後の充実につなげたい。また、フィンランドでは、アルヴァ・アアルトの建築を見学し建築空間を体験した。本稿では、特に都市デザインや建築に着目し、何を得て来たのか記録し考察する。

2. 北欧 2 カ国の旅程計画

実施時期に対し、およそ1年前に研修先を北欧に決めた。本学科のカリキュラムにおける、デザイン対象となる分野で主要となるのは、服飾、プロダクト、建築、情報である。この幅広い分野に対し、適する内容を検討する事になるが、担当者の専門分野もあり、建築のなかでも特に、インテリア中心に捉えることで、これらを網羅する方向性が定まった。気候条件が厳しい環境のなかで、充実し洗練されたデザイン力を誇る北欧を研修先とした。

北欧のなかでも、建築家アルヴァ・アアルトの出身国であり、マリメッコ等のファブリック、イッタラ等のガラスや陶器のデザインを生み出したフィンランドを中心に検討を進めた。さらに、学科教員の経験知や旅行会社からの提案も踏まえ、ノルウェーが、もう1カ国の候補となった。ノルウェーに着目すると地形的には長崎市と同様に湾奥に首都オスロがあり、現在、ウォーターフロントにおける都市の再開発が進み、形として表れてきている時期であることがわかった。長崎市もまた、駅周辺整備や公共建築の建て替えの時期を迎えており、街がかわる100年に一度の時期と言われている。本学は、学生の多くが長崎出身であり、地元の学生が多く集まる大学である。その点に

においても、街並みや街の人々の様子を目の当たりとすることも期待した。以上を要因として北欧 2 カ国は、フィンランドとノルウェーに決定し、それぞれの首都であるヘルシンキとオスロを訪問都市とした。

3. 実施内容

1) 事前準備と事前研修

実施に至るまでを報告する。実施年度である 4 月当初、ガイダンスを実施し、実施を告げた。その後、7 月中旬に、北欧 2 カ国（ノルウェー：オスロ、フィンランド：ヘルシンキ）の 2 カ国で計画している旅程を示し、旅行会社も含めて初回のガイダンスを行った。生活デザイン研修の科目は、希望者のみ参加を募るが、隔年で実施することもあり、3 年次迄の学生を対象とし、かつ、2、3 年生を優先的に募る。夏季休暇の間に家庭での検討や、資金計画等の目安になるよう、概算の金額や、申込の手順等も踏まえた連絡を行い、十分な検討時間を設けた。7 月の時点では、詳細な訪問先を示すには至れず検討を進めていた。具体的な旅程として、当初、フィンランドではマリメッコの工場見学を希望していたが、工事中で不可能であることが確定し、旅行会社からの代替案等も含め模索する中で、大学側からイッタラ&アラビアデザインセンターを提案し変更した。主な訪問先を整え、10 月末に正式に旅行会社との契約を済ませている。11 月末に、希望学生がおおむね確定した。希望が確定した時点で、学生へは事前調査となる課題を出題し、冬期休暇前に提出を求めた。同時期に、第 2 回のガイダンスを実施し、旅行会社からも詳細な連絡等を受け、冬季休暇の間に、準備の目処をつけることを促した。

1 月に入り最終確認の段階となる。現地での事前確認等から、観光シーズンではない為に、ノルウェーのオスロにある、DogA での見学に関し、展示入れ替え等の影響で企画がなく、微修正が必要となった。港町オスロの都市の再開発が進む現状を見学する内容を代替案とした。

以上の過程を経て、実施に至った。

2) 実施内容

(1) 実施概要

最終的に 23 名の学生の参加があった。そのうち 1 年生 3 名、2 年生 9 名、3 年生 11 名であった。学科から引率教員者 1 名と添乗員 1 名を含め 25 名で実施する事となり、かつ自己研修以外の時間には現地添乗員 1 名を加えて実施する事とした。実施期間の旅程と、訪問先を表 1 に示す。福岡空港発、成田空港からヘルシンキヴァンター空港を経由してオスロ空港着の往路と、ヘルシンキ発、成田空港から羽田空港へバス移動し、長崎空港着で解散する復路のプログラムとなった。福岡の朝一便での出発であり、参加者の多くが福岡に前泊した。福岡の朝一便の混雑を経て、成田では Wi-Fi を空港でレンタルする時間と、軽食をとる時間等があり、ゆっくりと出発を待つことができた。往路で、ヘルシンキ発オスロ着の便が 50 分程遅れた以外は、旅程通りの日程で進める事ができた。

特に往路では、予定通りではあるが、約 10 時間のフライトの後、ヘルシンキでの乗り継ぎを経てオスロへの移動と長時間の移動であった。夜遅くにホテルに到着し、暗い静けさのなか、暖かな照明と暖炉の空間に迎え入れられたことが、北欧に来た実感にも繋がり印象に残る。また、翌日の朝食が多様な食材の内容と時間が充実したことも、移動の疲れの回復に繋がり、その後の旅程をスムーズに繋げてくれた。さらに、30 年に一度と言われる暖冬の影響で積雪や凍結の影響を受けず、天候にも恵まれた。

表1 日程と訪問先

2020年 訪問先と日程			
日程	ノルウェー（オスロ）訪問先	日程	フィンランド（ヘルシンキ）訪問先
2月23日	福岡空港→成田空港 ヘルシンキ・ヴァンター空港 ノルウェー・オスロ空港	2月26日 午前 午後	ヘルシンキ・ヴァンター空港 イッタラ&アラビア デザインセンター ヘルシンキ大聖堂・元老院広場・マーケット広場 市内レストラン(夕食)
2月24日 午前 午後	オスロ市庁舎 オスロ王宮 ムンク美術館 市内Cafe(昼食) ノルウェーデザイン建築センターDogA 国立オペラ&バレエ劇場(オペラハウス) オスロ再開発地区(オスロ中央駅周辺)	2月27日 午前 午後	アアルト自邸・アアルトスタジオ アアルト大学 自主研修(各グループの主な行先) ・アモス・レックス(美術館) ・シベリウス公園 ・スオメンリンナ島(世界遺産:要塞跡) ・マリメッコテフターンミュージラマ アウトレット ・デザイン地区
2月25日 終日	自主研修(各グループ毎の主な行先) ・ノーベル平和センター ・アーケシェフス城 ・カール・ヨハン通り ・ノルウェー民族博物館 ・グリネルロッカ地区(個々のショップ等) ・アストルップ・ファーンリ現代美術館 ・オスロ大聖堂	2月28日 午前 午後	自主研修(各グループの主な行先) ・ペンテリアウキオ教会 ・カンピ礼拝堂 ・ヘルシンキ中央図書館; Oodi オーディ ・ヘルシンキ現代美術館 ・ヘルシンキ市立美術館 ヘルシンキ・ヴァンター空港
2月26日	ノルウェー・オスロ空港	2月29日	成田空港→羽田空港→長崎空港

(2) 旅程詳細

ノルウェー（オスロ）2日目

①オスロ市庁舎

市庁舎の見学と同時に、現地添乗員により内装の壁画をもとにノルウェーの歴史やエピソード等の解説を受け、現在のノルウェーの市民生活に至る過程を知ることができた。各部屋の用途や、壁画や装飾の所以から、歴史や時代背景や、人物像等を知る機会になることを体験した。

②オスロ王宮

外観だけの見学であるが、王宮を中心とした街路の配置や歩行者天国となった街路デザイン、周辺の建物、街並み、王宮周辺のランドスケープを体験する場となった。そして、個々の建物の色彩も着目して見る機会となった。

③ムンク美術館

次年度には、新しく新設される美術館への移転が予定されていた。移転前の企画展により、ムンクの絵だけでなく、他の作者の作品も鑑賞することができた。ここでも作品を見るだけでなく、作品の解説とともに、その時のムンクの精神状況等も含め背景も解説を聞くことができた。同時に、他の作者の作品も見ることができ、他作品とムンクの比較によって、よりムンクの絵の特性が際立つ見学となった。建物の内装に着目しても、日本の美術館ではあまり活用されない壁面の色使いがあり、その中で絵画を展示する空間を体験できた。

④ノルウェーデザイン建築センターDogA

展示の見学を当初は予定していたが観光シーズンではないこともあり、直前で展示の入れ替えにあたるのが直前に判明していた。併設のカフェは開いており内部の見学は可能であった為、訪問した。河川敷に建つこの建築物は、旧水力発電所で、建物自体は補強を加える程度の改修がなされ、レンガの壁面等からの素材感そのままに伝える。用途を変え 2,3 階分が吹き抜ける大空間を活用し展示空間として活用されている。コンバージョン建築の一事例として見学する機会となった。

⑤国立オペラ&バレエ劇場(オペラハウス)

オスロ中心部の再開発の一つとして海沿いに建つ建築物である。設計者はスノヘッタである¹⁾。他作品には、ニューヨークの9.11の跡地に建設されたグラウンドゼロの設計者でもある¹⁾。このオペラハウスでの見学は、内部のホールではなく屋外空間が主であった。その建築の形状の特徴から

周辺のみならず、屋根に相当する部分までを一体的に開放している建築物である。オスロ中心部は、ウォーターフロントにおいて再開発が進み、歩いて回遊できる歩行空間が充実し、住空間とも隣接するエリアへと変化を遂げ、その整備が完成しつつある。見学時は積雪もなく、晴天にも恵まれ建物の屋上迄のぼり、オスロの街並みを一望する機会を得た。この景色を保つべく、高さ制限がされている地域であると現地添乗員から説明を受けた。屋上からの眺めが効果的であること、見学時は薄氷であったが、凍結する港と一体的になる建築物であることを体感できた。また、現地添乗員のスムーズな誘導と案内により、まずは海岸沿いから海を挟んで建物全体を捉え、海辺を歩き、オペラハウスに近づいた。刻々と建築の外観が変化する魅力も体験することができた。さらに、丘をのぼるように、屋上に導かれ、自ずとオスロの街を眺めることにも、港の美しさを眺めることにも繋がり、大理石の素材感を体験することにも繋がる。表面の仕上げの違いや色合いも含め、オスロの光とともに体感することができた。



図1 オペラハウス

⑥オスロ再開発地区（バーコードビル、オスロ中央駅）

ノルウェーデザイン建築センターDogA で、展示が無いタイミングに重なった事を補填して、現地添乗員によりオスロの再開発地区を案内してもらうこととなった。オスロ中央駅から、港に向かうエリアは、高速の地下化が進みアーバンデザインの整備もすすみつつあった。あちこちで行われている工事の様子からも都市が変化していることが感じられる。歩いている片方には工事を見かけるが、その仕上がりが丁寧で、石畳でありながら、歩いて回ることにストレスがないことに気づく。身体的にも、動線的にも歩行者（人）にやさしい街になりつつあることが体感できた。

オスロ中央駅に隣接するエリアは、ビジネス街でもあり、新設されたビルが立ち並ぶ。高さがおおよそ揃うものの、異なる建築家の個性が表層に現れたビルが並ぶ。その様なビルが並ぶ外観から、このエリアはバーコードと呼ばれている。この地区では、移動や回遊性には多くの配慮がなされていることがわかる。例えば、オスロ駅は多くの路線が並ぶ終着駅で、線路で分断されたエリアが、路線の上の橋でつながれている。また、ビルの足元は、公共性の高いカフェ等の店舗の用途が見られ、屋内外が一体的となるピロティー部分もあり、歩道部分と一体的な整備と利用がなされている。異なる建築家の設計による建物が並ぶにも関わらず、得られている一体感、建物が個々の個性を保ちつつも調和がとれている様子は、高さが揃うだけでなく、アーバンデザインにより実現されている所も大きい。現地添乗員によりウォーターフロントから中央駅まで案内され、旧市街とはまた違う、再開発地区の都市空間を体験することとなった。



図2 オスロ再開発地区



図3 バーコードビル

⑦自主研修 ノルウェー（オスロ）3日目

ノルウェーの3日目は1日、自主研修となる。2日目に全体での訪問を終えた後の午後数時間を自己研修とし、オスロ中央駅で解散した。駅にて自主研修に向け解散する前に、明日の自主研修に備え、目的地へのアクセス方法や、公共交通のワンデイチケットの購入手続き等迄、現地添乗員に相談する時間を設けることができた。これにより、次の日の自己研修で、学生が自分で出かける事が後押しされ、活動範囲が広がり実際に訪ねることに繋がった。3日目の自己研修先として、学生が個々に訪れた先は、ノーベル平和センター、アーケシュフス城、カール・ヨハン通り、ノルウェー民族博物館、グリーンルロッカ地区（個々のショップ等）、アストルupp・ファーンリ現代美術館、オスロ大聖堂であった。

フィンランド（ヘルシンキ）4日目

⑧イッタラ&アラビア デザインセンター

4日目の午前中に、フィンランドに入国後、イッタラ&アラビアデザインセンターに到着した。同センターの社員食堂でもある食堂にて全員で昼食である。工場跡地だが、現在は、工場の移転に伴い、一部1階に、図書スペース、ショップ、食堂が併設されている。プロダクト、インテリア、カフェ等のショップが揃う。ここで、計画した見学ツアーを10名程度に分かれデザインセンターの解説を受けながら実施した。陶器等のプロダクトを扱うイッタラ&アラビアの全貌が分かる模型や航空写真をもとに、概略を聞き、次に、商品によるインスタレーション、歴代の製品の各デザイン、製作に使われた道具、製作のプロセス、デザイナーのスケッチや、デザイナーのアトリエを見学、また、作業中のデザイナーの様子も案内してもらい説明を受けた。一つ一つ丁寧な説明を受け、インスタレーションや、個々のプロダクトの形が、どんな意味を持っているのか、何から派生したものか、作者の意図等、またデザイナーが採用された経緯や仕事の仕方等、充実した説明を受けることができた。また、人が製作する過程で生じる少しずつ異なる個々の違いの所以などを聞きプロダクトの魅力に触れることができた。その後、ショップにて品揃えの良い商品を目の当たりにする。ショップでは日本人店員から、とてもフレンドリーな対応を頂き、学生の質問にも応対して頂いた。

⑨ヘルシンキ大聖堂・元老院広場・マーケット広場（ウォーターフロント）

結構な寒さと、イッタラ&アラビア デザインセンターで多少長く時間を取ったことから、自由時間も全員でバス移動の観光へ現地添乗員が対応してくれた。ヘルシンキの観光名所でもある大聖堂や元老院広場、大聖堂の内部を見学できた。海辺のマーケット広場、仮設市場や常設市場、近年設置されている海水のプールやサウナ付きの観覧車等を外部から見学する。海沿いにはアアルトの建

築も残り、外観を見学する機会に繋がった。1階エントランス部分がピロティーで特徴的な形状の建築で、外壁の大理石の形状とガラス窓の木枠が美しい。

フィンランド（ヘルシンキ）5日目

⑩アアルト自邸・アアルトスタジオ

アアルトの自邸はアアルト財団により管理され見学できる。10名程度の2班に分かれアアルト財団スタッフの解説を含め見学した。近隣にあるスタジオも同様で、2班を入れ替え見学した。アアルトの自邸は1930年代の住宅である²⁾。その為、家具等には触れられず、土足でも入れないが、内部に入っての見学が可能であった。周辺から歩いて建物に近づく為、外観を見学することに繋がる。アアルトの自邸は、道路側には閉鎖的な設え（図4）で、小さな入り口から内部の見学が始まる。内部は自邸でありながら、事務所機能を備えた部分と、リビングダイニングと2階の寝室・子供部屋等がある。現在は、当時、応接・接客スペースだった部分をショップとして活用されている。

小さな片開の玄関から入る玄関脇のクロークに自らの靴やコートを預け、小さな段差を上り、リビングに進む。閉鎖的な玄関から一転し庭に開けた壁面幅いっぱいの大きな木枠のガラス窓が目に入り、窓越しに建物の外壁に沿って庭にまで繋がって開ける。大きなガラス窓下には、棚や暖房器具が設置されているものの邪魔しない高さで、屋内に置かれた植栽と、庭の緑と繋がりから一体感が感じられる。外観からはコンパクトな印象だが、南側の庭への広がりや、家具と暖炉を囲む配置からか、広さを十分に感じる。また、同じ窓越しに隣接する事務所機能を持つ部屋部分の白い外壁も続き視線を導く。見学時は冬季で植栽の緑は無かったが、蔦が這うための格子が施され、時期によっては赤い葉がつくという。



図4 アアルト自邸（玄関側）



図5 アアルト自邸（庭側）

リビング左手にはダイニングが続き、内部のクロスが木で抑えられ和の印象を与える。アアルトは、日本の建築に興味をもちつつも来日したことは無いと言われている。ダイニングチェアや、拡張できるダイニングテーブルの仕組み、そして、キッチンとダイニングを間地切る造作家具には、キッチンとダイニングの両側から引き出せる引き出し等の機能が仕込まれている様子等、見学しつつ説明を受け、部屋を使う動作に伴い、細部に至る設計された様子がわかる。

設計事務所として使われた部屋は、玄関からリビングに入るとリビングの右手に隣接し、部屋を仕切る壁一杯の引戸でつながる。リビングから一段上がり2階迄の吹き抜けの空間になっている。机上への直射日光を避けたハイサイドの窓や、アアルトの専用だったといわれる部屋の隅は、2方向の窓により、部屋の角に暗がりをつくらず、広がりを感じられる空間であった。吹き抜けに隣接する2階部分は見学できないが、事務所からさらに数段上がり、スキップフロアとなっているアアルトの書斎部分は、部屋の入口のぞき込むことができる。

2階は、階段をあがりきると暖炉を囲むコンパクトなりビングスペースがあり、両サイドに寝室や客室や子供部屋が囲む。2階に配置された水回りには、丸形の天窗からの太陽光が入り、照明をつけなくても明るさを持つ様子を体験できた。

庭に回ると、レンガに白く塗られた壁に太陽光が当たることで、そのテクスチャーが際立つ。また、樹木から長い影が白い壁面に落ち、建物自体がその場に落ち着いている。L型の平面形状の建物の端に揃えて低い石垣があり建物の庭として区切る(図5)。敷地は緩やかな斜面で、高い方に建物が建つ。緩やかに少し土留める様に敷石が並び、低い石垣の外側から庭へ回りアプローチする。

アアルトの自邸は、湖畔に近い。かつては、自邸から湖畔が見通せていたといわれる²⁾。現在は、周辺が高級住宅地となり、自邸から湖畔が見渡せることはないが、地形に沿う一体感を、より感じられたことが想像できるようだった。

スタジオでも、同様にアアルト財団のスタッフによる説明を受けた。1階の食堂には、自邸と同様に詳細に設計された造作家具がおさまる。キッチンも食堂もコンパクトでありながら、窮屈さが無く、落ち着く空間になることを体験できる。オレンジに近い床のタイルや、壁の白、また、木材の組合せが柔らかい。2階の設計事務所は、向かい合わせの両側面に設けられた窓が心地良く、一方は光を天井に伝えるとともに、一方は窓から空と周辺の緑が鮮明に見える空間になっていた。また、アアルトの建築作品の模型に加え、建築の内装に用いられた陶器や、家具等に用いられる曲線の木材のサンプルが展示されている。また、スタジオは緩やかな円形劇場の形状をした庭と一体化し、庭の円形に立面が沿い局面の壁となり2層の吹き抜けで構成されている。外部の光が差し込む空間になっている。吹き抜けでは様々な照明の検討が行われた様子がそのままに展示されていた。



図6 アアルト スタジオ (車道側外観)



図7 アアルト スタジオ (庭側外観)

⑩アアルト大学

アアルト大学ではキャンパス見学を依頼していた。建築学科在籍の女子学生が案内してくれた。アアルト大学は旧ヘルシンキ工科大学があったキャンパスに、旧ヘルシンキ美術大学、旧ヘルシンキ経済大学が、2010年に一つのアアルト大学として合併された大学である^{3,4)}。ヘルシンキ工科大学建築学科を卒業したアアルトがキャンパスを設計している。アアルトの建築として残っている建物(本館・講堂・大学図書館)と、アアルトの設計ではないが、合併により新設されたアアルト大学の芸術・デザイン・建築学部(School of Arts, Design and Architecture)とビジネス学部(School of Business)の建物を見学することができた。また、Dipoliと呼ばれる、講堂・イベントスペース・食堂が兼ね備えられた建築も見学することができた。大きく3種類の建築見学ができた。

芸術・デザイン・建築学部、経済学部のキャンパスは、平面形状からも単に一つのキャンパスに集まっただけでないことが伝わる。それぞれ異なった分野が、閉ざされることなく、ガラスを多用された壁により開けており、また、各分野の教室等がテーブル椅子や簡易的なキッチンを備えた共有空間を挟んだ配置となっている。互いの専門分野がどんな取組をしているのか感じ取れ、また異なる分野の学生や研究者が、同じ共有空間を共有することによって接点を持ち、新たな創造を導く可能性が感じられる空間であった。

Dipoliは、この土地の岩石の地質を生かした設計・インテリアであることを説明頂いた。講堂の

形状も地質を生かした形状となり、施工で生じた岩石を内部のインテリアにも生かした内装となっていた。

以降は、アアルトの設計による建築物の見学について記録する。

・本館・講堂（レクチャーホール）

この建物が、このキャンパスのメイン建築であり、建物の高さもこの建築物の高さを超えないようにキャンパス計画されている説明を受ける。学生が集う、屋外空間として、外部空間が設計され、その形状を反転させた内部が、講堂になっている。外観は、円形劇場の形状と外壁の赤レンガ、上部の銅の素材による緑青が特徴的な建築であり、キャンパスのランドマークにもなっている。内部は、アアルトの特徴的なドアノブや、手すり、内装の壁面に施される陶器、天窓、曲面の壁、自邸にも見られた壁の布張り等が特徴的な空間となっている。講堂内部は、大空間をつくる梁を明確に表す構造に伴う形状、ハイサイドと白い壁から入る柔らかい自然光が、同様に特徴的である。先に自邸やスタジオを見学した際に展示されていたサンプルが、実際に使われている様子を目の当たりにすることができる。

・大学図書館

最上階から案内頂いたが、ハイサイドの窓から入る自然光が曲面の天井に注ぎ、柔らかく滑らかな明るさが提供される空間になっている。アアルト財団の監修のもと改修され、劣化により、地下部分は建設当時から改修が加わっているとの説明だった。既存の形状の名残をあえてそのままに改修で切断した部分等は表しになっていた。改修された地下空間は用途も近年の需要に応じており、メディア等に対応したスタジオやプロジェクターの活用、講義形式のスペース、多様な姿勢を促す家具や、壁面にくりぬかれた円形の備え付けの家具、照度の違いも活用されていた。また、地下空間の暗がりや払拭する階段まわりの照明器具や、床材の色等、効果的なインテリアを備え、24時間利用可能であることに対応した多様な空間がしつらえられていた。また、書庫に使われる可動式の書架が、オープンな空間で活用されていた。



図8 アアルト大学

⑫自主研修 フィンランド（ヘルシンキ）5・6日目

自主研修の時間に、多くの学生がフィンランドでは2019年に世界一の図書館に選ばれた⁵⁾ヘルシンキ中央図書館（Oodi）へ多くの学生が訪ねている。一つの建物が多用途に使われ思い思いの過ごし方をする様子が、まるで公園のようで、3Dプリンターや大判プリンター、ミシン、音響設備、メディア機器等が市民に開放され、貸し出される整った環境は経験し難い体験で印象に残ったようだ。

4. おわりに

近年、社会情勢の影響で実施できていなかった海外研修が、2019年度に実施でき、その過程と実施内容、そして特に訪問先とした建築について、その体験を記述した。現地添乗員の誘導やリアルタイムな情報提供により、それぞれの体験が充実したものになった印象が強い。自主研修では学生が自ら積極的に見て回る行動力を体感し得られた経験、そのプロセスが、今後に活かされること、それぞれの学生の興味を起点として、豊かな生活空間を導く事の機会に繋がることを期待する。

特に、建築や都市デザインに関して記述した。空間を体験すること、空間に身を浸すことで体得できる感覚がある。アアルトの建築に関しては、自宅やスタジオの見学が先行し、アアルト大学での建築を見ることができた事は、その順番が効果的であった。スタジオの建築や、展示でみるスタジオの結果や個々の作品で見られる形状が、異なる建築に用いられ、継承なのか展開される様子を目の当たりにできて、造形することや設計することに対する思考の継続を感じることができた。

【参考文献】

- 1) a+u Architects, online HP, <https://backnumber.japan-architect.co.jp/japanese/2maga/au/magazine/2008/09/frame.html>, 2020.02.06 閲覧
- 2) アルヴァ・アアルト美術館, 修正改訂版 2015, アルヴァ・アアルトの建築 10号,
- 3) Aalto university, <https://www.aalto.fi/en/aalto-university>, 2020.02.06 閲覧
- 4) Aalto University アアルト大学, Benesse マイナビジョン, <https://manabi.benesse.ne.jp/daigaku/kaigai-kaigai/search/#!/area?id=182&detail=true>, 2020.02.06 閲覧
- 5) カレントアウェアネス・ポータル, 国立国会図書館, <https://current.ndl.go.jp/node/38893> 2020.02.06 閲覧